

三國 玲子（みくに・れいこ）

1、プロフィール

アララギ的写実の技法に立つ歌人。鹿児島寿蔵に師事し、初めナイーブな青春歌とみずみずしい相聞歌を歌った。ついで歌境を深め、歴史的視野を持つ独自の社会詠を作った。

<生没>

1896(明治 29)年4月 27 日 ~ 1976(昭和 51)年5月 16 日

<代表作>

歌集『空を指す枝』『鏡壁』

評論「わが体験的 40 年代記」

<青森との関わり>

1945 年から 1947 年まで弘前に疎開。アララギ歌会に出席し、「アララギ」「潮汐」に入会、津軽で作歌に志した。

2、作家解説

三國玲子は、父三國慶一（弘前市出身彫刻家）と母アサ（旧姓南雲、栃木県出身、画家を志す）の長女として東京に生まれた。疎開地弘前で「アララギ」「潮汐」「新泉」に入会、鹿児島寿蔵に師事し短歌に進む決意をした。のちに疎開生活が父祖の意識を、戦争体験が社会詠をもたらし、独特な三國短歌が誕生した。

60 年安保闘争・ベトナム戦争に関する行動、古代朝鮮と祖の意識を通じ、いかに生き何を歌うべきかを考えた。全身全霊を込めた短歌は気品と孤愁に満ち、生前の六歌集は全ての歌風が変貌した。「潮汐」の後継誌「求青」編集人。朝日歌壇時評初の女性執筆者。現代歌人協会会員。日本文芸家協会会員。入院先で自裁した。享年 63 歳。

第1歌集『空を指す枝』(1954年)は、浪漫的青春歌が若者の共感を得た。第2回新歌人会賞受賞。疎開地弘前の作品も秀作で、女性の歌集刊行の先駆けとなった。

つば広き帽子を男に拾はしめ何時もクインになりたいのでせう 『空を指す枝』

第2歌集『花前線』(1965年)は『空を指す枝』に無いと評された社会性に目を向けた。第3歌集『噴水時計』(1970年)は叙情と社会性の融合が高く評価された。

ただ一人の束縛を待つと書きしより雲の分布は日々に美し 『花前線』

戦後とはわれに何なりし藤波の髪飾ゆるる今日の車内に 『噴水時計』

第4歌集『蓮歩』(1978年)と第5歌集『晨の雪』(1983年)は、「父の国と古代朝鮮へのまなざし」が社会詠を耕し、感性ある大作と「祖の意識」が極まった。

いにしへも今も等しき哀しみに朝鮮を想ふ貝塚の上 『蓮歩』

国防を言ふならば言へ先づ起ちてその子を狩れよみづからの子を 『晨の雪』

第6歌集『鏡壁』(1986年)は第11回現代短歌女流賞に輝く。写実に立つ社会詠は抒情と思想が融和し、祖の意識と戦争体験が三國を昭和の時代の語り部たらしめた。

旭日のすぢ褪せて立つかの旗を忘れむとしき忘れ得ざりき 『鏡壁』

3、資料紹介

○第6歌集『鏡壁』

図書

1986(昭和61)年11月29日

193mm×130mm

三國の歌風は常に変貌を遂げた。処女歌集『空を指す枝』の甘美な青春歌から、第6歌集『鏡壁』の鋭く時代を見すえた社会詠に到達した。第11回現代短歌女流賞を得た『鏡壁』は、戦後をいかに生きるかという自己命題に対する最後のメッセージとなった。